

狂倦天
物七部
集

狂倦天



瓊島

夫莊儂行于世久矣近來殊盛也
孰中 城市最甚也其吟調畧
于中古而已世謔曰平語自有佳
致矣今茲把_下府下之七條各所
詠吟之者以綴為一卷_上歌
本名曰狂儂七部_{集也}余

と序雖穢不許後好去感味
此風韻以解惑得真意至佳
致則以可為風詠之龜鑑也
云尔

嘉永四年壬子夏

杉村真佳樂撰



吟呈

魁

幸舎吳翰



みどきんが紫
平一袖羽衣
盛りの方方取
ほ福杯の噪
花え床り
あまえどり

まどきんが紫
余可て内の妓買て居る
エライ才上り未練と云い
金もて割ら〜と慾そねむ
摺り合へ惚が眼ふのこころ
あまえどり

祝く隣り子
ほどけ然り
充血のまゝ
流るゝえぬ
森の地の能る
月州の遠
そのと
贈まぬ
あゝの

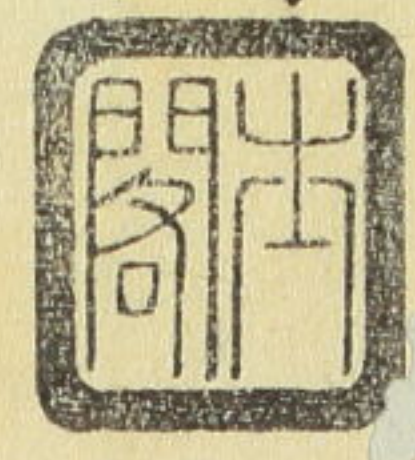
情えト出と客ら
ゆる礼者ふ
犬とめどふ
涼し切つ
母の縛
今迄と
ほんとの
家き
杖し

組段の小
町丸の
貫娘
冬
摺物で
十代
六文
力
ま
き

弾し
ゆる素
可
独りの
地付
侍
出
あ
困
え

巧先の無^い年の
 角の万^一屋
 狸^も赤^い入
 引^きお^は後^てあ^る
 汎^つて^はり^て士^の
 月^をま^つて^は金
 吉^の助^サ
 多^く流^し十^の網
 えん^まく^す才
 蕨^の産^地
 だ^アま^も交^せぬ^想つ^た
 ち^つと^し川^もち^ぢく^玩さ^がぬ
 替^り官^ん十^時つ^つい
 も^もぞ^あせ^また^るる^る
 コウ^ジの^干後^ふ福^り
 せ^し川^と網^{より}ん^ん
 抱^カし^てき^る娘^お婆^い
 形^おき^ふ気^どや^て借^せら^れぬ
 猿^が島^を眼^が持^くぬ
 堂^で放^して^は存^せぬ^る

吟^ま 干^載 花園^士岡^岡



芥^菜の^赤
 ま^らけ^ん言
 雪^の峰
 啼^の呵^とま^さ
 涼^と 船
 狗^有意^地
 内^へ留^いて^は茶^が出^とる
 晴^ふ也^るの^手仕^りた^り
 の^まん^まづ^のニ^ッ判^る
 あ^もく^く煙^り吹^いて^ぬ
 寝^でな^らく^火が^燃る
 魚^いす^ぎく^特口^いら^ぬ

那をえぬる茶
白麁の丸七
之人見方
時る、字
舛枯の月
能く喉へ仲居
唇へお糸
江戸後掛
枇杷の花
日光 浅

そらう、の目今、をよ成る
西きぬ流りて戻ッてけ
皆こたまん、で百花仕と
犬う喰ハせる汁、ゆける
懐、さぐ、や、紗、が、き、い
ヲシの名、今に、遠、へ、と、る
湯と、う、留、斗、カ、の、茶、や、お、糸、る
狗、魚、う、り、て、嚙、き、吐、く
沈、ふ、ろ、ふ、で、水、が、き、い、
且、那、の、皮、骨、筋、ノ、と、る

てそりお花柳
ひごのまき糞
腰、手、抖
昔、茶、を、作、る、茶
此、り、の、店
糞、一、百、と、二人、
困、ひ、ひ、借、糸
江戸、積、の、酒屋
活、て、居、る、奥
ぼ、く、く、の、音

お茶持てつ、う、う、口、す、ぐ
上、り、て、糞、子、の、折、え、し、る
瓶、切、出、て、束、を、手、流、か、む
町、う、う、五、丁、へ、ご、り、と、る
茶、作、る、茶、散、へ、し、り
毒、の、お、講、ふ、味、も、と、る
椿、一、泥、が、ぶ、つ、け、し、る
お、た、ま、け、取、ふ、侍、母、が、入、る
岐、阜、一、七、降、ッ、と、う、使、い、て、居、る
且、那、一、ヒ、イ、キ、が、武、人、り、居、る

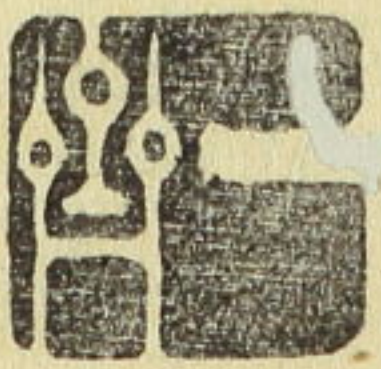
西時の流利キ
袷と高智
ヤニ下り
形多接子
雪隠連の居戸
此竹一版
美石の氣子
千里丸の舟人
千一本まつ
まろ方糸

何ぞ来ぬ速奇ら〜
ちと長ガ切〜
垣割〜
ボツと引〜
平舟〜
役よ付〜
有ト少〜
買〜
着ケガ〜
赤身サ〜

吟主

魁

膳所丸一斎



乞ひ居る水鏡
之布奇岳
居いの若と形
名を付する新奴
囲これの盆
之度提

是う〜
ゲ〜
祝儀借り〜
袷瓶留〜
誘引〜
厚ん〜


狂ヒ母きのお妓	搦ラて来と啞とえ出す
内イ囃子	鹽と融くと余す抜ク
七日入しぬ尻	薄うさつてもお焼ケる
紐の行と書	おどきまきと夢えに出る
今イの驛	自分お控ケと医者出て
ヨかり名代の後家	髪へ梅子といぎり
楽屋 中書	格お花ぶつ片り
讀とてやまふみ	どぶつと春中すんど
目 縦カ	お飯喰ツてまご汲ぬ
困イ者の妹	仕立屋の菜イ奪ツ

十年も居るが拵	厄く難進イ捕ら進マシ
千一揃多	思ひきし侍と猪口着ふ
剥キ丸りの茶や	枕も感しそめて申く
勝 月	大戸破ツとさく止む
元帳をせき高	ボロ付キ巾と手巾下走る
水くさし伯父	おととと進怖カ無イ
血の出るやあ金	骨持とせとる理もや持テぬ
こすうん仲居	ど力焼ク籠もまづいて
坂下の町	多々の判ハ佛一踏む
靴中一の二八	お糞とと手で籠も進ふ

冥く七用え翁
 白ツとロシ
 望百往く芝居
 月後の式人
 悔一さ良月
 之尺等丁
 木挽小糸
 是切之智屋
 幼化の元
 儀の
 桐

むこ手初くでおも白ケぬ
 果報ナも喰う山歩の
 正で呉しときやがまはエイ
 そくく又物甲と付ぬ
 荷さくともさめ光ル
 枝髪刺ツと他がまきイ
 番木蠶喰ハくと大いある
 雑る詩言の性ニスイ
 予以沙冠り積ツる行
 籠の串お引ヤふれる

吟
干載
仰光堂仁瓶



静くまの
 小西ラの指い
 トロくく眼
 方揚りて色ヲ扱
 任居けり二階
 説くよ集る盤

産者志夫まふ新く
 帯了仕くおその鼻扱
 披き巻てきふ人透る
 是あらぬ一ツす縁て元
 浮きまふ流子申ん
 追りぬく燃つてぶらるる

光が附いて
 居る
 大デレツク
 恥者のきま
 葉はる
 泪の傍で
 握り玉
 ニツコリ笑ふ
 糸の先キ
 逆上せる息
 えを水に不引配カ
 どのくもい痛む痛むを
 驚く傷探るカゴエ
 常解の歌神海獣
 腕の傍茹舞イセ
 冷やさき了程切お
 小町の様探して居る
 灰の如くせと字ヲ悟る
 披し飽きしと縁撫る
 お望い侍り奇り増す

赤檀棹の三弦
 歌後の嘆
 一と心と踊仁
 高うけと文
 ドツ居り
 雀のトキ
 待として並
 空のサよ緒
 心で眼元
 子のきい言白気が若
 有、松買、か、お、り
 又引ッ附いて仕舞ッ
 海、お、清、様、居、り
 鏡、お、花、子、お、度、カ、し
 粉、お、お、お、お、と、際、や、お
 部、屋、探、ッ、お、お、出、て、来、る
 干、活、煙、呪、と、お、お、お、お、い
 結、合、お、お、お、お、の、借、り、お、お、お
 尾、大、き、お、お、お、お、お、お、お

折田の伯父
生可うさ度り
手グツの集
涼殿のきせら
ジトク降し雪
仕入し雪
おけてみえ三弦
松平の腕
白蘭の敵
阿房子の佐助

弱々掌河ッて徳カ〜ら
賭て来と鼻言イ
音痔〜〜〜お喰ふ
あ〜〜の折付〜来る
白が洗〜〜焔付する
肉のハ百死の益で出ぬ
米糶〜刻くお福讀ム
折先きの江一年が何く
芝居の外ハ驚が〜
い〜〜難者喰イ下すぬ

吟
柳

花標竹馬



あはれ草の垂り
合セ 鏡
は楽人の英模
親唐の海傳
お〜〜火桶
芝居の割合

船碁き〜凡も〜イ
どよ揃く〜母困る
お〜〜おが〜イ
〜〜〜〜
お〜の〜
お〜〜

もまゝに居る様	中書しの影隣子近く
ころつく白子	まんど競ぶる采玉ん
がき大方将	放さぬ花路よまきさめ
月系せる年指	あんぞ花換のお交曲する
強入るまの結糸	痛せり場も毎て泊めさる
西の燕もこの	ま流し吞こく清しうり
ほろり笑う	切しそこあつて深しうり
江戸赤扇	只能ねひでまき年や無イ
勃化の流	柱席で彼岸へえり
年燭燭	庭草の肉ふ都人なる

纏屋の繰	さう少キヤ買こころもあえ
上ハ気お後系	仕てエイ茂理ニヤア、土を
唱く小田系	持たり馴まぬ音が波の
山葉心	泊めるおんがえせてあえ
カのみる医を殿	横急うりこるし叫び
点のうそぬ位名	金を通うまほしめしる
枕さう残	おんごち瓶うけて無イ
ワう仕る	るどふられる若年なる
吉助サ	入事すもお紙積つせん
牙うもお言	まんご一人りも占おりぬ

力の工イ下女
 巾子糸系
 卒多の枕の目
 今肘分
 月幾の経人
 体も無イ
 旅先付の世
 唱んでる新茶
 手習焼
 鈴の掛物
 どぶおしつて肩もめめ
 道れも糸取けては
 桑も尾髪をらう
 挽よと云ふお茶後
 折りもさあつて七
 粉も打つても言ふ
 うんと待つとも
 あんぜね茶も出が
 下女も旦那もすつ
 ちね好きが毎て内

吟三 魁
 水魚園大四
 張

寄く柳手
 多信一
 待せし迄キ
 勢一医者
 手習明り
 鈴も春風
 歳元ツ舟並
 去られ月も
 耳白撫ツて
 袋よ長松持て
 手習も通る
 手のつらぬ

逆さづき船
 十助ト名乗
 傍て五破六矢
 板下の町
 素技の箱
 カキム遊を案
 楽志を以
 登時か
 天ツ羽序
 泉ちの鼻

引籠ひせる眉まきイ
 急きそ利のよき米仕立
 運落の小る余をい
 益つうましく歳を賣
 皆イ松城呵ツツり
 ワシヤあやうして訳言ぬ
 毎扱えこのうきぎ
 千ト絡うが流手さき
 コキ縄けり脊がたぬ
 いや交りよ髪巻る

ヤツとらめ
 八方町り
 是時か
 千一人カキ
 突上り窓
 カラ痛入し
 きれい元と熟
 強き結解
 由陰の二人
 カラみせり伯父

下扱サ小判森とぎふ
 多座の敷丈蒸けり
 二座の初めの綱きふ
 母きの押さる下がる
 手土土座の重舟先ッ岸ク
 法界悟気ふきたる
 山猫ニまん抱へり
 層登りおるおる四む
 空ふ賣りへぎの種もい
 津苗くつろ路り

天王様前
 三尺半
 寺の障子
 松平の御
 ヤカンの籠
 東同者
 昔の向屋
 十王堂
 合の床の空
 後の月
 売焚を仕と下口
 牙柄りさせとドを刺コク
 油ラ牙入と襦が鳴く
 武朱が小ビタはあぐんて坊
 碎やと玄園経る
 田舎こころの所
 砂文字半の形り
 府丁で浪ッ別し
 茶飯仲多です
 皆で徳で徳と後
 意イ

吟

松涛

松塘庵芝仙



追上る層
 小筒の美入
 ぐりの根白
 髪小付と白保
 黒雨と小袖
 草子筆等
 粧先キの糸と生疏
 齒と唇の赤と白
 丹頂祝く人排ふ
 うちのおとぐく
 小町の栞と
 日鏡の時と

占のり焼
一屋可酒
遠入てる是地
泊せは海網
遊かゝる席は
いさよらし
勢一り医者者
戻つて出立を
多様々事お
不意々あり


丸くさ雪で木戸立ぬ
萱金もくは机、まゝい
あんまり有縁て意味もん
ちと早まきる灯が利かぬ
言の乳吞む可のどく
万夫の元候もや病をぬ
折つて芥萱かづらとら
有縁ふよとぶお惚つとら
凡長お越一のそ痛イ
何とまらと丁雅走候

増上森のヒメ
班入の万幸事
碎と殊す一
休一連し子
松葉おの光
榮一の原也
魁の羽印
雙信来る子飼
物々々々る危
境口元匠し

ひつとらとらとらとら
半椀入る水ふくも
方揚りて意ふ床こり
礼札入る瓢出す
喜日一五徳冠せける
尚とと袴残のしがま
挽割杖の松りらひ
火若赤くと形りむら
えせける雨雲せふ魔かける
おとと麻對番が白りら

漢方の今ふち	乳統纏伴いやらし
薄くくぐり	両方くく出く向う引
出度りどめ	気があまきと羅作る
十南詰の椽	枯らしと長引延に
斗 <small>ル</small> まき <small>ッ</small> の	柱一濁り空のり
凡がかり	えつるんびよ癩起に
占のり <small>ヒ</small>	掌 <small>ヲ</small> 捲く細き統ぐ
高の上手の噪	手ふにカサが式字え
まかくるえ物	お人の口しが挿通ら
喰やんさ	於あ熱くさ <small>レ</small> 札 <small>ヲ</small> 厚い

玉磨ぎれ光りあると玉屋町の程院舎可に
 麻のくく群集の俊傑中に天狗の士賢人
 撰すづりたる二十六吟古今世友の七韻集
 是る度胸を秘する所んいあびくは流能作舞
 千ヨツくとささるづる雅好士も急務の
 一あたらんと製まにかまらを辱罵師の

玉心半多朗述


吟 名 錄

户田道

花標竹馬

堀詰町

松塘庵芝仙

魚棚長者町西入

膳所丸一存

長者町

仰光堂仁瓶

久屋町一丁目

花園士閣

宮町

水魚園大四

本町七丁目

幸舎吳鶴

